

海軍

第三十二特別根拠地隊 ミンダナオ島で生き抜く

岐阜県 高井 太郎

「高井さんは海軍とのことですが、志願したのですか。艦艇は何に乗っていましたか。」

私は大正十年一月二十日生れですが、志願ではなく徴兵で、呉鎮守府の大竹海兵団に現役として入営しました。

昭和十七年十一月から三ヶ月間教育を受けたのです。砲術とかいろいろ専門のものもあるのですが、私は船の水兵として新しい一等巡洋艦「鈴谷（一万トン）」

に乗組となった。我々の仲間は十五人ぐらいで、トラック島まで、輸送（給糧）艦「間宮」に便乗。呉を出港したのは十八年初めて五日前後かかったのではないかと思う。途中空襲などは全然無く無事に着くことが出来た。

乗り組んでから「鈴谷」は塗装のため呉に帰った。十五日ぐらい経ったら、アリユーシヤンのアッツ島が危ないというので、冬物を積んで呉を出港した。

横須賀へ入港してアッツ島玉砕（五月二十九日）を知り、冬物はまた陸揚げして、今度はニューギニアに行く海軍の兵隊を一杯乗せてラポウルで兵を降ろした。その兵隊たちは、小さい船に乗り換えてニューギニアへ出港したが、途中で皆やられ海没したという。

三ヶ月程ラポウルに居た時、上官の兵曹長が通信学

校へ入れというので、横須賀海軍通信学校に入校して、三カ月の教育を受けた。教育は当時の電波探知機のようなものでした。

卒業してから呉で三カ月程船待ちして、輸送船でフィリピンのミンダナオ島へ行つて、サンオガクチン岬に勤務をしていたが、戦況が悪くなつて、サイパン島から在留邦人や後方勤務の人たちが引き揚げてきた。サンオガクチン岬で電探で監視していたが、その船は雷撃を受けたので、それを救助に行つた。しかし、船は縦になつたらそのまま沈んでしまつた、船から人が皆海へ飛び込む、女も子供も多かつたので、救けることが出来たのは百人足らずだった。

ーマリアナ諸島ばかりでなく、西部ニューギニア、フィリピン方面も段々酷しい戦局を迎えてきました。たが、ミンダナオ島は大丈夫だったのですか。

一週間ぐらいして、敵の潜水艦の潜望鏡が見えて、艦が浮上し砲撃してきました。他の軍艦も、我々監視所のある岬に艦砲射撃をしてきて、それが終わつたら飛行機の爆撃です。見張所は全部破壊された。人々は

山を越えて退避したので艦砲の直撃は避けられたが、爆撃で施設は壊されてしまつた。

三日程経つてから隊長の兵曹長の通信機が破壊されたので、小さい無線機で対岸のカリアン見張所へ連絡した。すると、ダバオから装備した日本海軍が舟艇で偵察に來た。我々が日本軍だと確認して荷物、通信機、食料などを降ろし、救護隊は司令部のあるダバオへ帰つていった。

その後、しばらく後に、ダバオへ敵が船艇二十隻ぐらいで來襲して上陸、日本守備隊はやられた。我々は、その頃、岬に上陸するかと思ひ警備していたが上陸はしないで、爆撃と艦砲射撃のみだった。我々の隊では私ら十人ぐらいがダバオの本隊に引き揚げ、六十人ぐらゐが岬へ残つた。

ダバオの海軍司令部は毎日爆撃を受けていたので、大きな隧道を掘つて発電設備をし、内地とも通信していた。私は通信ではなく、将校従兵だったが、そのうちに敵の攻撃も激しくなつて來たので、隧道をそのままにしてまた奥地の方へ撤退した。その後はさらに山

中を撤退した。我々には兵器は何も無い。これでは戦鬪が出来ない。米軍の戦車が走るのも見えたが、こちらには隠れるだけしか方法がなかった。

手榴弾も弾薬もない、海軍だから個人の武器は持っている。司令部の指揮小隊に居たのだが、分散して五十人ぐらいになってしまった。食料も無いので栄養失調になる。多い時には一カ月で七人ぐらい死んだ。司令官は少将だったが、それを守る兵器も無い。

食べる物はなく、もちろん補給も無いのだが、ダバオ河（巾五十メートル位）の向こうに、二町歩（二ヘクタール）ぐらいの芋畑があつて、芋が取るばかりになつている。米軍が上陸したため撤退した日本軍設営隊の耕した畑だった。

渡河も危ないが、舟があつたのでそれを漕いで行き、皆（各隊三―五人宛）で食糧収穫をした。それで命長らえた。他に食糧はなかった。米軍はジャングルにもいたが、夜になると全部引き揚げるので、夜の間に取りに行った。そのため両軍のぶつかりは無い、というよりこちらは武器が無いのだから、隠れて取りに行く

だけだった。

軍の司令部はマンドックにあつたが、マンドックはダバオから一時間ぐらいの所。その近くまで米軍が来ていたので、それからジャングルの中に入った。ジャングルの中は家が無いので、先遣隊が先に行き木を切り柱を建て、ニッパ椰子の葉で屋根を葺くと本隊がそこへ行き、段々と奥に入つていった。病人は残し「後から来いよ」と言うが、病人は食料も無く薬も無いのだから餓死か病死してしまう。

原住民は日本軍が来るので逃げてしまった。奥の方へ行くと、山の中にチョコチョコと原住民の畑や田園がある、その作物を食べていた。奥の方へ行くのは先ず将校斥候が偵察して道を見つけて進んでいく。すると住民は逃げる、その後へ日本軍が入るといふことだが、おそらく米軍は原住民から情報を取つていたので。だから日本軍は住民には危害を加えなかった。

米軍が押すとこちらは撤退してジャングルの中へ中へと入った。司令官は年配だが歩かねば仕方なく、兵隊と一緒に撤退した。フィリピン、ミンダナオに対す

る爆撃、砲撃は激しかったが、こちらが歯向かわないから戦闘は少ない。

補充兵が来たが未教育だし、銃は獵銃などのため、スコールが来ると弾が濡れて、火薬の入っているボール紙が膨張してしまい銃につめることが出来ない。我々の所の補充兵は二十人ぐらいだった。

終戦までの半年ぐらいは随分砲弾を打ち込まれたが、我が隊での戦死者は十人ぐらいだ。それより栄養失調、悪性マラリヤで死んだ者が多かった。私と一緒に入団した同年兵は三分の一ぐらしか残れなかった。他はほとんど死んだ。

死骸を埋めたくとも穴を深く掘る道具が無く、死体をかくすだけだ。朝になると野犬が掘り出して食べたあとがある。死体を埋めた所へ行けば私は判るつもりだが、今はどうなっているだろうか。

ミンダナオには陸・海軍両方の部隊が駐屯していたが、陸軍は満州から来た岐阜の多賀大隊が、タモ草原で米軍と射ち合っていた。海軍と陸軍の最高幹部は、私が出た司令部で一カ月に一回作戦会議を開いていた

ので、何処に陸軍がいるかは判っていた。しかし、米軍の上陸に対処するため終戦までの二カ月ぐらいは、陸海の連絡がとれなかった。

――終戦は何時ごろ知ったのですか。米軍との交渉や、その後の生活はどうでしたか。

終戦を知るまでの半年間、先ほども言ったとおり山の奥へ入り込んだり、砲爆撃を受けたりだが、ミンダナオといっても随分広い面積だし、フィリピン群島には何千という島があつたから、米軍も日本軍と真面目な戦闘を避け、遠巻きにしていたようだ。

その間に、通信がやつとれ、日本が負けたということが判った。その時は司令部を中心にして指揮はとれていた。将校が白旗を作り、五人程連れて敵方へ行った。白旗を持っているので敵からの射撃は無かった。これで降伏することが決まって、日本の飛行場まで米軍が自動車で迎えに来たのでそれに乗り、キャンプ場まで行った。そこには、四、五人用のテントが張っており、引き揚げまでそこにいたが、ここも飛行場の跡のようだった。

抑留中の食料は支給されたが、今まで半年間も食うや食わずというより、食わない方が多かったのだから、何でも御馳走、今までは何も無かったのだから。テントは丈夫で、スコールが来て大丈夫だった。内地への帰国を待っていたわけだが、一度には引き揚げられなく逐次引き揚げとなった。私等の船は四隻目で、二十一年一月頃横須賀へ着き、元の海軍工作学校に入った。病人は随分残して来たがあとはどうなったのか、生きて帰れたのか、死んでしまわれたのか知る由もない。私は幸にもどうにか生きて帰れたのだが。

復員の時は、僅かな金と、服と毛布一枚に靴、これだけが自分の物だった。岐阜駅へ着いたら、市街地は焼け野原、向こうの長良川の堤防下を歩いている人が見えるほどの見通しになってしまっていた。自宅は焼けなかったが、兄の家は焼けてしまった。私の家は岐阜市でも田舎の方だったので、当面は食うことは出来たが、街の人たちは大変だった。

私は上官の兵曹長が帰っていると思い、揖斐郡へ会いに行ったが帰っていなかった。何処で死んだのか判

らない。恐らく山の奥だったから消息は不明だったろう。同年兵は相当死んでいるが、三分の一は帰って来たと思うのだが、一部の人に一度会っただけで、その後は会っていない。今はどうなっているのか判らない。

私は帰ってから、マラリヤで一週間ぐらい寝たが、司令部の同僚が特効薬のキニーネを持って来てくれ、それを分けて貰ったのを、終戦後まで持っていたので、それを吞んで助かった。栄養失調はキャンプ生活中の米軍給与で回復した。キャンプ場には六千人ぐらい収容されていたらしいが、オーストラリア米、缶詰など一日三度渡され、野菜こそ無かったが、体力は回復していた。

その後、お蔭で体調も良く現在に至っています。私は海軍でも陸に揚って、特別根拠地隊で、電波探知機での敵監視や、司令部の指揮隊にいたから良かったのだが、初めに乗った一等巡洋艦「鈴谷」はレイテ沖で沈んだ。ラポウルにいた時「学校へ行く気はないか、この艦で行けば三年学校へ行ける」と、艦長や兵曹長に言われて学校へ行つて助かった。その時は巡洋艦「木

曾」に乗って帰ったのだが、その後ラポウルは上空襲、寄港したトラック島を出たらトラック大空襲。これが運命の別れ道だった。まったく私は、海軍、ミンダオ島生き残りの幸運児だと今も感謝している。

今でも死んだ戦友や上司のことを思い出すのだが、ダバオに居た人たちは一年に一度は「ダバオ会」で会合しているが、話は何時も、ミンダオ島の苦しみと、戦没者のことだ。あの遺体は、山の中のジャングルで、そのまま眠っているのか、厚生省で遺骨収集してくれているのだろうか。そのことを思いながらも、実役三年何ヵ月、加算で普通恩給受給資格はあると思っただが、学校期間だけ足らぬという。学校期間で、恩給と命のとり代えをしたかと、自分に言い聞かせている。

私の軍歴は陸軍と海軍 軍人と軍

属

京都市 四方 順 市

―四方さんの軍歴は随分長く、しかも陸軍と海軍を経験しているようですが、始めは陸軍ですか。

大正四年一月十一日綾部で生れ、徴兵検査は第一種です。その頃（昭和十年徴集兵）は甲種合格だけが現役入営でした。昭和十二年支那事変が始まったためか、その年の九月二十六日に教育召集が来て大阪信太山の野砲兵連隊の中で編成された高射砲（防空）第三連隊第二中隊に配属されたのです。

ですから最初は陸軍高射砲隊の召集兵というわけです。二ヵ月間基本教育を受け、訓練は中々厳しくて、初年兵の私はビクビクした日を送っていたが、十二月に召集解除。

勤務していた舞鶴海軍工廠に復帰して三年半程いた